

# HARA MUSEUM ARC 特別展示室 観海庵

## 青空は、太陽の反対側にある 原美術館／原六郎コレクション

【秋冬季 | 後期】2023年11月10日[金]—2024年1月8日[月・祝]

### 出品作品

 撮影 NG マークの作品をのぞき、写真撮影が可能です。

**1**   
アニッシュ カプーア  
虚空  
顔料、ファイバーグラス  
1992年  
128 x 97 x 92.5 cm

**2 - 6**  
奈良 美智  
Mirror  
(In the Floating World)  
Ocean Child  
(In the Floating World)  
Full Moon Night  
(In the Floating World)  
Cup Kid  
(In the Floating World)  
No Fun!  
(In the Floating World)  
再加工した木版、ゼロックス  
プリント  
1999年  
各 41.5 x 29.5 cm (29.5 x  
41.5 cm)  
作家蔵

**7 - 10\***   
クリスト  
アブダビでのマスタバ建設の  
プロジェクト  
紙、フォトスタットに鉛筆、木炭、  
パステル  
1981年  
81 x 59.2 cm

包まれた遊歩道、東京、上野  
公園のプロジェクト  
鉛筆、布、木炭、クレヨン、地  
図、写真  
1969年  
71 x 56 cm

アンブレラ、日本とアメリカ合  
衆国のジョイントプロジェクト  
紙に鉛筆、木炭、布、クレヨン、  
パステル  
1986年  
66.7 x 76.8 cm

アンブレラ、日本とアメリカ合  
衆国のジョイントプロジェクト  
紙に鉛筆、木炭、布、クレヨン、  
パステル  
1986年  
66.7 x 76.8 cm

**11**   
野口 里佳  
潜る人  
ライトジェットプリント  
1995年  
121.7 x 176.6 cm

**12**  
せいじとりがたすいちゅう  
青磁鳥形水注  
一口 | 磁器  
高麗時代 (10 ~ 14 世紀)

**13\***  
じょりん  
徐霖  
しきさんすいず  
四季山水図  
四幅対 | 絹本墨画著色  
明時代 (17 世紀)

**14**  
ひらふくひゃくすい  
平福百穂  
ありそうず  
有磯鶉図  
一幅 | 紙本墨画著色金泥引  
明治時代 (20 世紀)

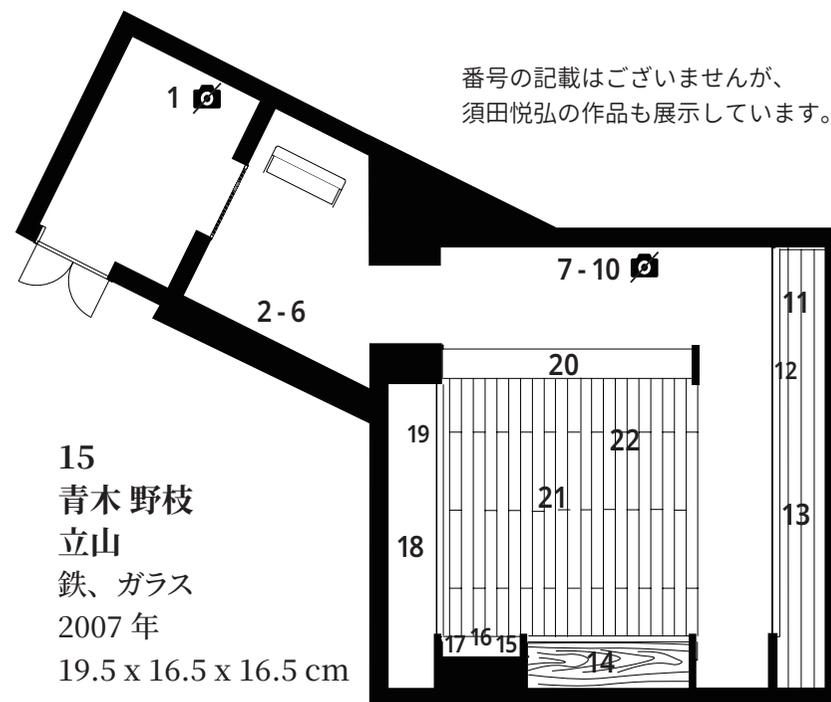
**15**  
青木 野枝  
立山  
鉄、ガラス  
2007年  
19.5 x 16.5 x 16.5 cm

**16**  
ぶどうりすまきえさげじゅう  
葡萄栗鼠蒔絵提重  
一基  
江戸～明治時代 (19 世紀)

**17**  
しろびぜんかもこうろ  
白備前鴨香炉  
一口 | 陶器  
江戸時代後期(18 ~ 19 世紀)

**18\***  
狩野 探幽 / かのうたんゆう  
りゅうこず  
龍虎図  
双幅 | 絹本墨画  
江戸時代 寛文十一年  
(1671年)

番号の記載はございませんが、  
須田悦弘の作品も展示しています。



**19**  
みかわちやき とりこうろ  
三川内焼 鳥香炉  
一口 | 磁器  
制作年不詳

**20\***  
こうえつうたいぼん  
光悦謡本 (内百番)  
版本 (古活字本)  
江戸時代 (17 世紀)

\* マークの作品は裏面に解説があります

21

奈良 美智

Peaceful Night

セラミック

2018年

29 x d.18 cm

作家蔵

特別展示室 観海庵 解説

7-10. クリスト (1935-2020)

日用品を布で包み、紐で縛ることから始まったクリストの「梱包」作品は、パリのポンヌフやベルリンの旧帝国会議事堂といった建築物を包む大掛かりなプロジェクトへと発展していった。

「アンブレラ、日本とアメリカ合衆国のジョイントプロジェクト」は茨城とカリフォルニアを舞台に、それぞれ黄色と青の傘3,100本ずつで覆うプロジェクト実現のためのコラージュである。

クリストは、プロジェクト毎に数多くのドロワーやコラージュを制作し販売し、実現のための膨大な費用を全て自身で賄っていたが、それはクリストによれば、「完全なる自由を手に入れるため」。実現までには環境の調査や行政との交渉等の長い道のりがあるが、最終的に期間限定のパブリックアートとなることで、誰の所有物でもない自由な作品が仕上がり、そして消えていく。撤収した後にもドロワーは残るが、それらは作品そのものではない。作品として残るものがあるとすれば、彼らのインスタレーションを体験した一人一人の中に生まれた心の動きだろう。それは時々、それぞれの心に蘇り、蘇った瞬間だけ作品のリアリティが戻ってくる。

13. 徐霖「四季山水図」 明時代(17世紀)

四幅に四季を割りあて七言詩を付し、人物を大きく扱った四幅対の山水故事人物図は、明時代後期に特に盛んに描かれた。

王右軍図(おうゆうぐんず)

書聖と称えられる中国・東晋時代の書家、王羲之(おうぎし、307-365)が、ガチョウの泳ぎを見て書の極意を悟ったという故事にちなむ。本図では、童子が鳥を抱えており、松のとげとげした枝ぶりと人物の輪郭線が印象的である。

漁樵問答図(ぎょしょうもんどうず)

世俗を離れて暮らす漁師と樵(きこり)とが、お互いの天分と境遇について問答する様子。詩には隠棲の理想を説いている。遠景の山々は薄い色を刷き、揺れる柳や芦は柔らかな曲線で表して、画面に夏の雰囲気を伝える。

22

奈良 美智

Thinker

セラミック

2018年

31x d.19 cm

作家蔵

扁舟弄遊図(へんしゅうろうゆうず)

身一つで笛を吹き、小舟で漂泊する隠棲の境地を描いている。山や松や滝と霧や舟が垂直に交わる構図が画面に静けさを生んでいるようだ。筆を横に倒して点を重ねて山や岩を表現しており、画面が湿潤な趣をもつ。

風雪敲門図(ふうせつこうもんず)

雪夜の訪問を描いた図の一つに、宋の建国者・太祖(たいそ、927-976)が、軍師である家臣・趙晋(ちょうふ、922-992)を訪ねて国事を計ったという故事をふまえるものがある。詩の内容から、この故事にちなんだ図と推測される。ここでは門を敲(たた)いたものの、諦めて帰りかけている様子が描かれている。

18. 狩野探幽「龍虎図」 江戸時代 寛文十一年(1671年)

雲の間から波上に姿を現す龍、体を反らして地を踏みしめる虎が描かれている。龍は雲をおこして雨をよび、虎は吠えたと風を起こすと考えられ、この両者を対峙させることは風雲に遭う覇者、すなわち英雄が世に現れ出る姿にたとえられ、武将や禅僧の間で好まれた。龍を囲む黒い雲は墨のにじみで表わされ、刻々と変化する雲の動感をもたらしている。そして、渦巻く雲や波が、力強い風の動きを感じさせる。

狩野探幽(1602-74)は、16歳にして江戸幕府の御用絵師となった。本作は従来の方強く壮麗な狩野派の様式を余白を生かした瀟洒な画風に一新した、探幽最晩年の作品である。

20. 「光悦謡本(内百番)」 江戸時代(17世紀)

江戸慶長年間(1596~1614)には、宮廷や武家、豪商の間で活字による印刷、出版文化が花開いた。本作は角倉素庵(すみのくらそあん)が主動し、木活字で刊行された観世流の謡本。平安時代の唐紙風に植物などをデザイン化した文様を具引紙(胡粉を塗布した紙)に雲母で摺り出した装丁と、2字~4字をつなげて作った木活字を組む古活字版によって印刷された本阿弥光悦流の書体が美しい。本書は、表紙および本文料紙全てに雲母摺模様のあることから「特製本」と考えられる。